

世田谷村日記

石山修武

九月四日

今日まで世田谷村で休み。

十一月のワークシヨップ各先生方に講議の依頼。鈴木、安藤、松村、難波、各先生の了解を得る。眼に余る甘え振りは自覚しているのだが、彼等が居ないと事は動かない。郊外住宅が近代そのものの成果であったということを踏まえて、脱近代の情報過剰をベースにした、サウオワ邸とは異なるタイプの「都市内住宅」をテーマに、それを具体化してゆく事を目標とする、機関誌が必要だ。鈴木博之編集長で創刊したい。

夜、山本夏彦さんの了解を得る。

山本さんは毛綱を惜しんで下さっていて、私の、三五才の毛綱は天才だったというのに同意してくれた。死んだ人間は誰かが彼を記憶しているうちは生きています。

幽迷界を生きる山本夏彦翁がその典型だ。この人は生きていないのに、すでに死んでいる人だと自分で言う。言い張る。しかも最近は何故か幽界の響きを帯びてきたようで、電話からもれ出てくるのは人間の声とも思えぬ雷公のいかづちか、あるいは不動明王の雄たけびとも思える音なのである。これ迄おなじみの山本翁のブツブツとくもる陰々滅々とした声が、雷公の声程に異常に大きくなっている。ガラガラゴロゴロした声に成長しているのだ。驚くべきエネルギーである。編集長になって毎月々に追われてヘトヘトだが、毎号一〇〇〇部つつ売り上げをのばすのだ。

と、ゴロゴロ声で宣言していた。不気味である、尋常ではない。「まあ、アンタのたのみじや断れないよ。」と言って下さって、十一月九日六時三〇分からの山本夏彦のレクチャーが決まった。この幽迷界の快人は六〇才を過ぎて天才になった珍しい人なのだ。

ところで山本さんは今、何才になったのだろう。八〇才はおに超えたと知っているが、まさに明るいわ化けだ。